

I'll give you a stupid example.



Imagine if you were capable of
an intelligent one.

Gilletteのたとえ話

距離と、変装と、監査する女について。

たとえば、

コミュニケーションは昔から、ある決まり文句に頼ってきた。

たとえば。

罪のない四文字。

無害で礼儀正しく見えるこの四文字には、ひとつ並外れた利点がある。許可を求めずに、他人の領分へ入りこめるのだ。

誰かが「たとえば」と言うとき、狙いがたとえ話そのものであることはめったにない。

狙いは距離だ。

人は、自分が問題の前にさらされるのを好まないからだ。自分の名前が弱さや、過ちや、矛盾に結びつけられるのを聞きたくはない。

だが同じものでも、それが他人のものであれば、いくらでも喜んで眺める。

そこでコミュニケーションは、見事な近道を発明した。

こう言うてはいけない。

「あなたはこうしている」

こう言うのだ。

「たとえば、こんな男がいるとしよう...」

するとたちまち、守りが解ける。

聞き手は話についていく。

登場人物を吟味する。

状況を裁く。

笑いさえするかもしれない。

気づくのは、あとになってからだ。

その人物は、はじめから他人などではなかった。

その人物は、聞き手自身だった。

たとえ話は、現実がまとった変装にすぎなかった。

すぐれた伝え手は、昔からそれを知っていた。

考えというものは、めったに正面玄関からは入らない。

脇の入口を好む。

たとえば、

人間関係は昔から、たとえ話に頼ってきた。とりわけ男と女のあいだでは。

男たちは何世紀もそれを使ってきた。

たとえば、海のそばで暮らしていたとしたら。

たとえば、5年早く出会っていたとしたら。

たとえば、ニューヨークへ移り住んだとしたら。

たとえば、互いが互いのものだったとしたら。

どの言葉も、現実を描いてはいない。

描いているのは建築だ。

言葉で建てた仮設の構造物。

証拠が届くより先に、可能性が入るのを許される部屋。

男たちはその部屋が大好きだ。

想像は、建設より安くつくからだ。

想像のなかでは、どんなプロジェクトもうまくいく。

どんな旅も成功する。

どんな女もわかってくれる。

どんな結末も都合がいい。

そして遅かれ早かれ、現実がやって来る。

しかも現実には、しばしば女の姿でやって来る。

賢い女は、聞く。

とても賢い女は、評価する。

一段上の女は、監査する。

その差は小さくない。

ありふれた会話なら、評価を生きのびるかもしれない。

プロジェクトなら、批判を生きのびるかもしれない。

幻想が監査を生きのびることは、決してない。

賢い男が、自分は未来を築いていたのか、それとも空想を飾りたてていただけなのかを知るのは、たいてい、まさにその瞬間だ。

答えはすぐに届く。

女はほとんどいつも、秒単位で請求する。

時間単位では、決してない。

たとえば、

何年もかけて説明を組み立ててきた男を想像してほしい。戦略。

シナリオ。

モデル。

建築。

現実をもっともらしく見せるために、システムがまるごと設計される。

そしてある日、自分の築いたシステムの寸法を超える知性をもった女に出会う。

劇的にではなく。

攻撃的にでもなく。

ただ、自然に。

彼女は聞く。

観察する。

待つ。

それから、ひとつ質問をする。

単純な質問だ。

10年がかりの知的建造物を、10秒で崩してしまう類いの質問。

そこで、めったにないことが起こる。

男は建てるのをやめる。

計画は突然、魅力を失う。

設計図は不要になる。

計算は飾りになる。

建築は消える。

プロジェクトはくずかごへ直行する。

打ち負かされたからではない。

辱められたからでもない。

ようやく、あることを理解したからだ。

たとえ話は、はじめから仮定の話などではなかった。

たとえ話は彼だった。

練習問題は彼だった。

事例研究は彼だった。

そして目の前に立つ女は、彼の想像のなかへ入ってきたのではなかった。

彼のほうが、彼女の想像のなかへ入っていたのだ。

フェルディナンド